

マスコミ

令和を迎えた今年、皮肉にも春の「桜を見る会」が散るような政治状況で年を終えようとしている。

南彰・望月衣塑子『安倍政治100のファクトチェック』(集英社新書)、南彰『報道事変』(朝日新書)、望月衣塑子・前川喜平・マーティン・フアクリー『同調圧力』(角川新書)は、ますます高まる長期政権の劣化とジャーナリズム機能の低下に警鐘を鳴らしていることが容易に読み取れる。

それは主としてSNSでフェイク、フェイクニュースが「拡散」するから生じる現代社会の混沌さ(病)でもあろう。飯塚恵子『ドキュメント誘導工作』(中公新書ラックレ)は国際政治の観点から、今日の世界の変動を「すくそはに迫る危機」(自分の意見が知らずに誰かに操られている)だという。フェイクや虚偽を流す

権力者は対峙する相手方を「フェイク」印象操作というワードで一方的に片づけようとする。「健全な民主主義の根幹を支える国民共有の知的資源(公文書等の管理に関する法律第一条)である「公文書」一つとっても、国家権力がその場しのぎに都合の良い解釈で終わらせようとしている。そうした病を前に、古賀純一郎『すべてを疑え

いる。ポスト真実』の時代のメディアリテラシーの本質は「あいまいな情報に耐える力」と説く。他方、佐藤卓己・川崎吉紀編『近代日本のメディア資源』(創元社)を読むと、戦前戦後新聞(放送)出身者がいかに多く国会議員になっていったものか、国家が誤った道を歩むことを止めることができなかった(できない)こと、は何を示唆しているか。

学出版会)そして外務省機密漏えい事件を暴いた西山太吉『記者と国家』(岩波書店)などからは、ジャーナリズム活動が戦後日本社会でどのような働きをしてきたかをもう一度問い直すことができると。黒崎正己『新聞記者・桐生悠々 村度ニッポンを「囓る』』(現代書館)や斎藤貴男『明治礼賛の正体』(岩波ブックレット)も、ジャーナリズム、

「一億総メディア化現象」、どう対峙すべきか

現代ジャーナリズムの危機とメディアの存在意義の問い直し

鈴木 雄 雅

!『旬報社』、松本一弥『ディープフェイクと闘う』(朝日新聞出版)、立岩陽一郎『ファクトチェック最前線』(あけび書房)は一読する価値がある。

それは、下山進『2050年のメディア』(文藝春秋)や成毛眞『世界最先端の戦略がわかる』(ダイアモンド)

メディアの存在意義を改めて問い直す刺激となるだろう。最後に二冊の研究書をあげる。

にしても、現代ジャーナリズムがここまで危機に陥る過程を知ることを見逃してはならない。

佐藤卓己『流言のメディア史』(岩波新書)はう

阪本博志『大宅壮一の「戦後」』(人文書院)や根津朝彦『戦後日本ジャーナリズムの思想』(東京大

急加速する裏に、権力の中心に食い込み利権をむさぼる構造の様が浮かび上がる。

大井眞二『ジャーナリズム・スタディーズのフ

イルド』(学文社)はメディアの自由論、比較ジャーナリズム、客観性、倫理、グローバル化といった今後ジャーナリズム研究を向上させる上で重要な様々なフィールドについて検討している。

からプロパガンダ、世論、大衆文化としてとらえて

る。とくに、ジャーナリズムがメディア化(プロフェッショナル化・商業化・技術の変化)する中で変容し信頼が揺らぎつつある現状に対しては、メディアの説明責任を報道内容だけでなく「コミュニケーション」過程全般に関わるものと広く捉え、透明性や双方向性について分析することの必要性を訴えている。

脇浜紀子・菅谷実(編著)『メディア・ローカリズム』(中央経済社)は副題に「地域ニュース・地域情報をどう支えるか」とあるように、デジタル化する社会で動画配信サービス、収益性の高い娯楽コンテンツが「拡散」するなか、メディアの公共的機能の在り方、メディア・ローカリズムを国内外からの視点で問うている。

大宅がテレビ放送の出現時に言った「一億総白痴化」は過去のものなのか。いや「一億総メディア化現象」に我々はどうか対峙すべきかが突きつけられている。(すずき・ゆうがII上智大学教授・新聞学)